

「三宝通信」法話

浄土宗 天上山 大念寺
住職 大島 祥明



日航機事故の副操縦士の 最期の思いを実感する

次の体験も、霊についての確信を深めることになりました。それは、日航機事故の被害者の方の葬儀でした。

昭和六十年の八月十二日に起こったあの日航機の墜落事故のことは、まだみなさまの記憶に残っていることと思いません。

その航空機の副操縦士の仮通夜が八月十五日、密葬が十六日、本葬が十八日と、四日間に行われましてそのときの葬儀の導師を私が勤めました。

その葬儀でお経をあげている間に、私は故人の事故発生から墜落にいたる副操縦士の気持ち、強く感じましたのです。

それは、機体の異常を感じ、トラブルの発生を知り、五分くらい機長に怒鳴られて、ムカツときたというか、非常に憤慨した感情が十分から十五分くらい強烈に伝わってきたのです。それはこういう感情でした。

——これは大変なことになった……。必死で操縦をしたが、まったく効果がない。どうしよう。いや、どうにもならない。

そんな焦燥感と無念さが、ひしひしと伝わってきました。その後、そのことをご遺族にお伝えしたのですが、ご遺族は、「どうして、そんなに詳しく感情にいたるまでわかるのですか……」と言って、不思議そうな表情をされていました。

そして、この副操縦士の最期の思いが確認されたのです。本葬儀の翌日の十九日の朝刊に、機体に取り付けられていたボイスレコーダーの内容が掲載されたのです。それによると、ボイスレコーダーには、まずなんらかの衝撃音が録音されています。そのとき機長が「なんか爆発したぞ」と言っています。

また、機長が副操縦士に対し「バンク(傾き)をそんなにとるな！ マニュアル(手動操縦)だから」(バンクを)もどせ！と怒鳴る声が記録されています。そして、副操縦士は「もどらない！」と返答しています。

その発表内容を読んでもみると、コックピットの会話の様子、私を感じとったこと、ほぼ完全に一致しております。

●PHPP研究所刊『死んだらおしまい、ではなかった』より。